

コロナ禍はヒトという種の生存に何を問題提起しているのか

—「人新世時代」末期のヒューマンイズムの驕りと欺瞞—

宮 澤 康 人

はじめに 一不都合な真実に目を凝らす一

コロナ禍は、普通のインフルエンザ並みの病へと自然におさまりそうな様子を見せている。だが、それが突きつけた問題は決して自然に解消することはない。

なぜなら、無数の種類のウィルスが、いまだ人類に接触する機会こそないまま、アフリカや南米の奥地、南・北極の氷の中、深海の底深くに潜んでいるからである。

それに、地球の現状が「人新世」と名付けられた通りのものであれば、問題の原因は、人間の生き方が絶えず創り出している。しかもその現実とは、不都合な真実として、正当に理解されず、多数の人類は、無意識のうちにそれから目をそらすか、あるいは、未曾有の科学技術が発明されて解決してくれるという奇跡を待ち望むに至る。

コロナ禍に続くウクライナ戦争が、今われら地球人の生き方を深刻に蝕んでいることは誰の目にも明らかだが、これらは突然、想定外の出来事としてわれらを襲ったのではない。もし、「突然、想定外の出来事」だと考える知識人がいたら、歴史的想像力の欠如を責められてしかるべきである。慢性戦争状態とコロナ禍には、人新世時代という、地球規模での歴史段階が共通基盤として存在することが見えないからである。

ウクライナ戦争は、いわゆる第二次大戦がいまだに終了していなかったことの現われにすぎない。それは第一次大戦以来の、パクス・グローバルの覇者を争う帝国主義戦争状態の延長である。その淵源は、19世紀末の帝国主義戦争、パクス・ブリタニカの野望とその挫折、さらにそれ以前にまで遡って見定めなければならない。

戦争は最大の消費であるといわれる。1929年に始まった世界大恐慌は、ニューディールの空前の政策でも解決できず、第二次大戦の大量消費によって、

一時的に解消した。この消費の代償は何千万の死者であり、その陰には軍需に関わる企業の莫大な利潤があった。

ウクライナ戦争も、人命の消失と軍需企業の利潤が一体になった不況救済の現代バージョンであることは疑えない。人新世時代の、特に現代の世界は、いわば慢性の戦争パンデミック状態にある。

一方コロナ禍が人類の知（いうまでもなく教育学を含む）に提起しているのは、まずなによりも、「生物全体社会」という世界観を持ちえない無知への反省である。現代の諸悪の究極の根源に、人類が生物全体社会（以下、生命全体システム・地球生命圏・ガイアとはほぼ同義に用いる）の中で獲得している特権を自明と思う人間中心主義（本論稿ではヒューマンイズムの最も単純な意味をこう理解する）の驕りがある。

戦争は最大の悪である、といわれるが、戦争と同等かそれ以上の悪があるとすれば、人新世をもたらした、人類の、生物全体社会に対するエゴイズムであろう。生物全体社会が壊滅すれば、もちろん人類は絶滅し、戦争さえ消滅する。戦争にも、ウィルス・微生物パンデミックの根源にも人新世があり、人類の働きがある。つまり、人類自身が人類の敵となる事態をつくりだした。このような事態に、ヒューマンイズムは無力であるばかりか、欺瞞的作用を及ぼしてきた。

したがって、本稿の課題は、先ず上記の事態、およびヒューマンイズム思想の流れを、主として思想的に理解すること、続いて、事態にまともに対応できる思想原理を作り出すための準備作業の手がかりを探すことである。その中心には、これまで見捨てられてきた「自然」原理の新発見がある。これは既存の自然概念に従って、人間のNATURE（自然・本性）を考えるのではなく、NATUREの中で人間を考えることである。NATUREの中で人類が生きる規範を発見、もしくは発明することになろう。そ

れには、人間の内と外にあるNATUREを全体として、また内と外のNATUREの連続と非連続の両面に注目しながら考えなければならない。

この作業私に迫るのは、ヒトが<自然本性なるもの>を喪失しながらその自覚がうすいまま、しかもかえって、それを誇っているかのように振舞うことへの嫌悪と憤りである。

一見これはヒューマン・ネイチャーであるヒューマニズムの復権を企てているように見える。だが実はその正反対である。ヒューマニズムを否定しながら、生物全体社会の一員としてのヒトの自然性を新たに探究し直さなければならない。

それにしても、こういう状況において、教育学関連の学会誌・紀要に人新世問題や、環境教育問題を主題とした論稿はみられない。なにゆえであろうか。深刻な危機と感じないためか、アカデミズムが取り上げるべきテーマとは考えられないのか、教育学の専門領域の外にあると見なされるからか、それとも、どう取り上げたらよいのか全く分からないからなのか。この問いは本稿の底を常に流れる。

I 人類破滅のシナリオ

いうまでもなく、地球生命圏自体が有限であり、いつかは滅びる。人類も、これまでの絶滅種と同様にいずれ絶滅する。

『人類が絶滅する6のシナリオ』という本もでている。著者は、『サイエンティフィックアメリカン』誌の編集長である。その第一章は、「世界を滅ぼすスーパーウィルス」に始まる。ちなみに、これはコロナ・パンデミック以前の、ウィルス学の非専門家の著書である。第五章も「迫りくるバイオテロリズム」とあり、微生物とウィルスの脅威への注目が強いことがわかる。ほかに「繰り返される大量絶滅」「突然起こりうる気候変動」「生態系の危うい均衡」「暴走するコンピュータ」という章がある。このうち、最後の「コンピュータの暴走」だけが、人類自身が固有に作りだした原因によるものであり、あとは、「人新世」と名付けられる所以の、人類の過剰なテクノロジー活動がもたらした、自然環境の変動と、そして地球自体が人類の働きの有無にかかわらず引き起こす変動とのいわば合併症と解される。

ちなみに、ここには核戦争による絶滅のシナリオがない。それは、ウクライナ戦争までは核抑止力理

論が効いていたためであろうか。もう一つちなみに、環境危機というと気候温暖化ばかりに注目が集まる傾向があるが、他にも、深刻な危機が同時進行している。核エネルギー利用後の廃棄物がもたらす大気、大地、海の汚染と生物全体社会への半永久的な破滅的影響はその一例である。環境問題への関心・認識は、マスメディア一般においていまだに狭く浅いように見える。

本書以外にも、破滅のシナリオはいくつも考えだされ続けるに違いない。だがいずれにせよ、実際に起こるのは様々な要因が複合するシナリオであろう。

本書の「終わりに」は「創意工夫のみが人類を救う」とある。人類が科学技術の進歩によって生み出してきた破滅の原因を、同じ科学技術のさらなる進歩で取り除くことは果たして可能だろうか。本書で人間の非力を暴いた同じ著者が、どうしてこんな楽観的な「むすび」が書けるのか不思議な気がする。いまだに蚊・トンボレベルの生命一匹作れない人類の科学技術に、生態系を維持する力を期待できるのだろうか。

6のシナリオのうち、ほぼ人新世段階だけに固有な要因、言い換えれば、人類の活動が単独要因であるのはコンピュータだけである。その他はすべて、人類なしでも生起する自然変動と見られる。

たとえそうであるにしても、人類としては何らかの対応をしないわけにはいかない。では、どんな創意工夫があり得るのか、どんな対応の仕方があるのか。実際、種々の分野で、多様な対応がなされている。次に一例として、あまり知られていないカトリック教会の対応を取り上げる。

II カトリック・エコロジーの挑戦と挫折

キリスト教と科学とエコロジーの関係については、初歩的なレベルにおいて、ねじれた誤解が層をなしている。

まずキリスト教が、科学に常に否定的であったという誤解。次に、そのキリスト教のカルヴィニズム・ピューリタニズムの神学が、近代科学の基盤となる自然観・世界観を用意したという解釈への誤解がある。カルヴィニズムの神は、人間の良い意志や行動に影響されて救済を決めるのではない。神は人間の思いを超絶した存在であり、神が創造した自然

は非情である。それが、自然の客観性、脱呪術性の根拠となって、近代自然科学が成立する。この逆説的解釈は、カルヴィニズムを無神論とする評価を生むことにもなる。

三つめの誤解は、ある意味でこれと正反対とも言える。自然は、神の愛によって創造されたものであるから、人間が科学技術を使ってそれを破壊することは神への冒瀆であり、それゆえキリスト教は本来、エコロジーの立場を支持する思想を内在させているという見方もある。その際、必ず言及されるのは13世紀の聖フランチェスコである。彼は、生きて在るものはすべて神の被造物として平等であると考え、すべてを差別することなく愛する思想と実践に生きた人物である。

聖フランチェスコは、民衆の間で熱狂的に人気のある聖人だが、異端の烙印を押されかけたほどキリスト教の神学を逸脱する人物でもあった。そのためか、これまで、2000年のカトリックの歴史の中で、フランチェスコを名乗る教皇は現れなかった。それで、その名の新しい教皇が選ばれた人事は意外性の反響を呼んだが、これには、現代世界の危機が反映しているところもあるだろう。彼は早速、エコロジカルな思想を率直に表明した回勅をだした。だが、それを知らないキリスト教信徒も少なくない。

「ラウダート・シ」と題された回勅は、「『環境問題についての明確で揺るがぬ関心とその解決のための積極的な取り組みの決意に貫かれ（中略）、『環境』回勅と称するにふさわしい』（『回勅 ラウダート・シ』訳者あとがき 232）とある。神が創造した自然のすべてを、そのまま無条件で心から称賛しないではいられない、という聖フランチェスコの自然賛美即神崇拜と同じ思想の表現である。

カトリック吉祥寺教会の後藤文雄神父が、講義のテキストにこれを取り上げたのは、聖職者の中でも例外的であろう。どのように読み解くかと、興味をかきたてられた私は、週一回の勉強会に非信徒として参加した。ところが、話の上手な神父なのに講義は滞った。それで日常の生活に引き付けようと、ビニールゴミの海水汚染の新聞記事を取り上げたり、ごみを少なくする運動の実践家を招いて話を聞いた。ちなみに、ホモ・サピエンスはリサイクルしない、つまり自然に反する有害ゴミの巨大な生産者である。燃やすゴミは、日本に限っても、東京ドーム200杯分、2兆円の経費がかかると報じられている。

その他の試みも重ねられたが、参加者の関心を高めることはできなかった。そして半年足らずのうちにテーマも別のものになってしまう。

参加者たちは、自己の魂の救いの問題に閉じこめるあまり、人間の魂と同様に神の創造物である自然環境の運命へと関心を広げることが難しいように見受けられた。

『回勅』の内容をもう少しだけ紹介しておこう。

邦訳の『回勅』は、全235頁、6章構成である。前書きにアッシジの聖フランチェスコへの賛辞が記され、聖者の名前は、「ローマ司教に選ばれたときに、導きとインスピレーションを願って選んだ名前」であり、「聖フランチェスコは、傷つきやすいものへの気遣いの最良の手段であり、喜びと真心をもって生きた、総合的な（インテグラル）エコロジーの最高の模範であると、わたしは信じています（16）」との言もある。

第一章は「ともに暮らす家に起きていること」と題して、いま地球上の自然環境に生じている、「汚染と気候変動」「生物多様性の喪失」など7点にわたる。

次の、第二章「創造の福音」には、「被造物の調和の中の被造物それぞれのメッセージ」を説きながら、「天地万物の交わり」という興味深い観点に至る。第三章「生態学的危機の人間根源」は、「人新世」時代という画期を作りだした説と近い世界認識を示し、生態学の成果を謙虚に学ぶ姿勢がうかがえる。

ただし、「ユダヤ・キリスト教の伝統において、「被造物界」という語は、どの被造物にもそれぞれ固有の価値と意義とを与える神の愛に満ちた計画に関係しているゆえに、「自然」よりも広い意味をもっています」という重要な念押しも忘れない。そして「ユダヤ・キリスト教の考えは、自然を非神格化します。その雄大さと広大さに感嘆しつつも、自然を神聖なものとは見ません。この非神格化によって、自然に対するわたしたち人間の責任がいつそう強調されます」（71）とも言う。

「自然を（中略）わたしたちの生活の単なる背景とみなすことはできません。わたしたちは自然の一部で、その中に包摂されており、それゆえ、自然とのたえざる相互作用の中にあります」（124）。「密接に絡み合う根本的な三つのかかわり、すなわち、神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわり

りによって、人間の生が成り立っていることを示唆します」(60)。「絶対者である神と恭順する人間の二分法」において、人間中心主義への戒めは、神に対してのそれと自然に対してのそれと二重の現れ方をするとも言及される

進化論へのコメントもある。「進化の過程を前提とするとしても、人間は、他の開放系の進化によっては十分に説明できない独自性をも有しています」(74)。そして「現実を解釈し、芸術作品を創作するわたしたちの能力」などを「独自性」の例にあげる。人間の働きの成果である芸術は、自然事物より優れている。それゆえ人間は、他の生物を超える生存権をもつとも言える。これはヒューマンイズムの奢りを支える思想に転化しうる、と筆者は受け取る。

また、「経済学を含むさまざまな学問分野を結集させることのできる、より全人的で統合的な展望に資するヒューマンイズムをわたしたちは必要としています」(126)とも言って、ここでもヒューマンイズムは呼びだされる。とはいえ他方、キリスト教的ヒューマンイズムは、根本的矛盾を隠した、近代のもっとも欺瞞的思想である、と断じるカール・レヴィットのような思想家がいることは明記しておきたい。

以上から、自然環境危機に立ち向かう教皇の思考の真摯さは疑いようもない。にもかかわらず、キリスト教とエコロジーの思想とは最終的に相いれないことがあらわになったのではないか。聖フランチェスコふうに、思考・感性においてエコロジーに近づけば近づくほど、キリスト教神学との対立は厳しくなるだろう。現に、教皇の孤立は、エコロジー論だけが理由ではないが、次第に深まっているという。それどころか、ローマ教皇のキリスト教的エコロジーは、SDGsキャンペーンに劣らず、「人新世」時代の危機の根源を覆い隠す欺瞞性をもつ、といった批判さえ耳にする。

以上の対応とは対極的な立場に立ち、エコロジーをいわば信仰の核に据える思想がある。

Ⅲ エコロジー教育学と環境教育の努力

太田 竜の『エコロジー教育学—新人類への進化の途—』には、「願文」と題して、信仰箇条が表明されている。

「願文・地球蘇生の大誓願

地球みどりの連合の創立に当たって」

一、私は、人類が三百年間つみ重ねて来た地球破壊と、人類による地球奴隷化の罪を心から懺悔します。

二、私は、人類が皆一人残らず、母なる地球の命を殺す罪人（つみびと）であることを自覚します。

三、私はいま地球の敵となっている人類の利己主義を離れて、地球の立場に立ち、地球の全生命と共に、地球全衆生の蘇生の行動に献身することを誓います。

と続き、最後に、

六、私の肉体がこの世を去ったあとも、人類の罪をつぐなう、地球衆生の蘇生の大誓願が達せられる迄は、菩薩となってこの地球にとどまり、子々孫々と共に、そして地上の全衆生と共に、母なる地球と共に、生きつづけますように。

合掌 1987年十月吉日」と結んでいる。

太田はあとがきに、「欧米型のエコロジー運動、みどりの運動の限界を明解に認識し、それを超克してゆく。「真人類への進化」という、大長征への旅立ち。これが、私のいま到着した地点です。」と記している。

「日本みどりの連合」から「地球みどりの連合」を経て、この願文に至るまでの思索と行動の軌跡をたどらずに、太田のエコロジーを科学以前のアニミズム信仰への逆戻りと片づけるのは、不当であろう。太田の志は、梅原 猛が『人類哲学序説』で素描した、「草木国土悉皆成仏」という天台本覚思想の世界観にも通じるように観測できる。しかし、検討が不十分なので、今回は評価は保留しておきたい。

太田の真剣な姿勢には敬服するが、深刻な危機に、なお冷静に向き合うことの難しさも感じさせられる。ところが、ラディカルな批判意識を冷静に展開した研究者もいた。

今は亡き畏友・北村和夫から、筆者はエコロジーの思想に関しては、最も多くの示唆をいただいた。その彼の『環境教育と学校の変革』の書評の冒頭に、「21世紀の最大の教育問題は環境教育である。」とさえ筆者は書いた。

北村は、学校という制度の反自然性を鋭く摘出すことによって、学校そのものの本質を否定的に評

価した。その思想を、学会大会シンポジウムのフロアなどで発信したのは、イリイチの反学校論が一部で衝撃を与え、流行するより先であったと思う。当然、激しい反発を招いた。

自然破壊と環境教育への関心は、とりわけ、人文・社会系の教育学関連の学会において一貫して薄かった。当時、ウィーン議定書の勧告から数十年も経ているのに、ある教育事典の「環境教育」の項目において、生態系やエコロジーの観点が無視され、古くからの遺伝か環境かといった心理学的問題ばかりが記述されたものがあったという信じられない事実がある。その執筆者は、後に教育学会の会長になった。

北村の書は、優れた発想に満ちているが、なかでも「まず自分があって、しかる後に環境を利用するのではない、まず自然があり、自然の変化の一樣相として自分という自然が生まれたのであり、自分が生まれた結果、自分以外の自然が環境になったのである」（北村、263）とか、自然環境として最も大切な「水に触れると気持ちがいいということは、本来自分と環境は一体であったということを示している」（同、263）などは忘れられない。

環境教育の要は、環境問題を考えること自体を愉しい探究（ニーチェのいうガーヤ・シエンツア）にすることである。そのためには、視覚だけでなく、聴覚、味覚、嗅覚、そして何より触覚、つまり全身全霊で自然と交響する能力の回復へのレッスンは不可欠である。そのことを北村は、「エコロジカル・ライフ」を身に着ける、というふうに表示した。

ここでは、この本の数々の重要命題を紹介する代わりに、環境教育に関して今なお、これを超える業績は発表されていないと筆者は信じている、とだけ言っておきたい。

以上のような流れにおいて、やはりヒューマニズムを正面から批判する必要が生まれるのである。

Ⅳ ヒューマニズムの曖昧さと欺瞞性批判

「エコロジー・アンチヒューマニズム・教育を考える会」を、1980年代の半ばに呼び掛けたことがあった。会はしばらくして頓挫したが、問題意識は、自然破壊状況の進行とともに本来なら先鋭化されなければならなかった。だがその後、ヒューマニズムの意味をどれだけ理解したうえで批判したのか反省

させられた。理解なしの批判は、単なる非難と同様、思想的に不毛ではないか。ここにおいて、改めてヒューマニズムとは何かを考えなくてはならないことになった。

これまで筆者は、ヒューマニズムを真っ向から否定する教育学に出会った覚えがない。西欧近代の教育学は西欧ヒューマニズムの申し子である。近代教育学の祖とされるコメニウスの『大教授学』の第一章のタイトルにも、「人間は被造物のうちでの最高の、絶対的な、最も卓越した存在である」とある。そうであるから、教育学は、ヒューマニズムを否定する思想的契機をもつことができない。1970年代の一時、「反教育学」を自称する主張はあった。しかし、それさえも、取りようによっては、むしろ、教育学はヒューマニズムに背くから許せない、というヒューマニズム擁護論に取れる。

ヒューマニズムの意味は、思いのほか明瞭ではない。ある国語辞典では、「(1) 人類の平和と幸福の増進を目的とする主義 (2) 人間の個性の自由な発達と人間性の尊厳を尊重する主義」（『新明解国語辞典』）とある。

(1) については、どのような人間の観点からも、異論を唱えることは難しい。但し、その視野は、人類内部に限られている。人類以外の生き物は想定されない。まさしくそのことが、この思想の、生物全体社会の危機の時代における限界を示す。この点は後ほど詳論する。

逆に、(2) となると、「個性」対普遍性、または個人性対公共性との対立、そして「自由な発達」とは何を意味するかという、重要かつ複雑な問題を新たに呼び起こす。「自由」とか「発達」とか「人間性」の概念を無媒介に礼賛する定義では、それに続くはずの議論を閉ざしてしまう。ことに、「人間性」は、ヒューマン・ネイチャー（人間の自然）として、そもそも「自然」とは何かを検討する本稿のⅤの検討主題としなければならない概念である。

『哲学・思想事典』（岩波書店）では、さすがに分析的検討がなされる。

まず、その一般的意味は「人間の価値と尊厳を重視する立場を表し、「人道主義」や「博愛主義」と類似した意味で用いられることが多い」としたうえで、それと学術的歴史概念である「ルネサンスの思想を特徴づける「人文主義」とは、「明確に区別されるべき」であると主張して、もっぱら後者を記述

する、と説明する。以下それに従う。

「人文主義 (Humanisumus)」の語自体は、19世紀初頭に、ドイツの教育学者ニートハンマーが、当時の高等教育における実用主義的な傾向に反対して、全人格的な人間形成におけるギリシア・ローマの古典教育の重要性を訴える際に創出した。続いて歴史家たちは、その意味での古典古代の再生・ルネサンスの思想にこの言葉を適用した。

しかしここで、私が検討・批判の対象にするのは、むしろ古代と古代の再生という歴史的文脈を背負いつつ、今や常識化して曖昧な「一般的意味」のほうである。

ヒューマニズムの理解を広げ深めるために、歴史的概念としての語義の系譜をたどってみよう。

『哲学・思想辞典』のこの項の執筆者 (三島憲一) は、前述のとおり、「人道主義」や「博愛主義」に類似した意味の一般用語と明確に区別すべき「特殊歴史的概念」即ち、「ルネサンスの思想を特徴づける「人文主義」」を記述するとことわっている。但し別の大辞典には、特殊日本的に、トルストイ、ガンジー、ロマンロラン、シュバイツァーの思想的系譜をヒューマニズムと呼ぶ一団があるとの指摘もある。

人文主義という言葉はドイツの教育学者ニートハンマーが創り出したという事実は、教育学者の間でさえ、日本に限らず、少なくともドイツ語圏を除いて意外に常識となっていない。これは、教育学の、人文学内の位置及び自己認識の曖昧さの一端を現わしているに違いない。

ここにはのちに自然科学、また社会科学と呼ばれる知も加えられることになるが、実証的、実学的な分野に対抗して、古典書物の読み書き、文字言語テキスト学習が中心であった。これに先立ち、ラテン語で *Studia humanitatis* と呼ばれ、文法、修辞学、歴史学、史学、道徳哲学を含む学科目も、古代の著作の講読と註解が主であった。ここには、ユダヤ・キリスト教がもともと文字言語の教典を重視する本の宗教であったことも影響していると思われる。それはやがて、中世の 7 liberal arts に定着し、自由人 (奴隷でない者) にふさわしい必須の教養という意味で、古代以来の伝統を引き継いだ。

奴隷でないこと、即ち肉体労働を免除されている、という特権的性格は、近代の教養思想の非生産的、特権的性格に深く影を落としている。この性格

のネガとポジの両面は、例えば、奴隷の思想であると蔑視されることもあるキリスト教における、労働の教育的価値の積極的評価との対比など、広い文脈の中で深く検証されなければならない重要な思想史的テーマである。であるのに、思いのほか突っ込んだ本格的な研究業績が少ないのではないか。

ヒューマニズムは、反産業と機械嫌悪の思想になりやすい。それに、肉体労働蔑視は、手指や足腰など身体を磨く教養の軽視に進み、さらに身体其自然 (physical nature) 自体の軽視に通じる。

古代文化における機械忌避は、古代が到達した高度な知的水準にもかかわらず、機械の発明・使用を軸とする、18世紀のような産業革命へと進まなかった要因の一つと指摘されることもある。

他方で人文主義は、古典文学への関心を高めるとともに、古代文化に顕著だった人間への関心を増大させ、人間への探究はルネサンスの中心テーマとさえなった。

フィッチョなどは、宇宙における人間の中心的地位を称揚し、人間がコスモス (宇宙) の縮図としてミクロコスモス性をもつことを自讃して、宇宙の中の人間の地位を誇り、他方、ビーコ・デッラ・ミランドラは、人間の自由意志の役割を強調し、その延長上に、人間の、とりわけ倫理の個人性を重要視した。これは、古代の倫理がポリスの一員という観点からもっぱら吟味されるのが通有であったのとは異質である。この観点は、教育思想史にも登場するアルベルティやM.パルミエーリらに受け継がれた。

これは、共同体から個人を解放する言わばポジの面と、個人を宇宙世界・コスモスの中に放りだし、孤独に追い込むネガの面をもつ近代化の両義性として、現代では理解されることになる。

さらにドイツを中心とする北方ルネサンスは宗教改革と結びつき、その結果、キリスト教的ヒューマニズムとも呼ばれるシンクレティズムまがいの思想が形成された。これこそ西欧が生み出した最高の人間観思想と思ひなす思想史家も少なくないだろう。ところが、カール・レーヴィットのような、根源的思索をする哲学者は、これに対して鋭い疑義を呈した。神中心を信条とするユダヤ・キリスト教と人間中心を核とするギリシア哲学は、それだけですでに両立しがたい思想であると。

思うに、その対立をはらんだディアレクティークこそが、むしろキリスト教ヒューマニズムのしたた

かさになるが、同時に、思想としての論理的行き詰まりにも出会わざるを得ない。それをもってレーヴィットは、近代以降の西欧哲学全体が、ハイデガーを含めて、キリスト教の終末論を前提とした歴史哲学に他ならないと断定するに至る。そして、今後の哲学は、歴史哲学ではなく、自然的世界の真理を探究すべきもの、即ち、自然を起点とし、自然に対する観想であるべきことを提唱した。

人文主義の再生ともいうべき、新人文主義が、18世紀の後半の、またしてもドイツに現れる。それに続く、ゲーテ、シラー、フンボルト、ヘーゲルによって確立された新人文主義的ギリシア観は、教養(Bildung)の思想とギムナジウムその他のエリート養成の教育を通じて、ドイツはもとより、西欧思想並びに日本に強い影響を与えた。Neuhumanismusという用語もまた、教育史家パウルゼンの提唱によるものであり、これも、教育学とヒューマニズムの縁の深さを物語っている。

もとより、調和と完成をなしとげたことを理由にギリシア文化を礼賛する人文主義的ギリシア観に異を唱えた、ブルクハルトやニーチェのような人物もいたことは無視できないが、それ以上に、人文主義者は総じて、自然事物に対する関心が薄く、文字で書かれたテキストしか研究対象にできない人たちであった、と評されることに注目しなければならない。自ら博物学の業績をあげたゲーテや、自然哲学の探究に晩年、骨身を削ったシェリングのような思想家は例外であった。人文主義が自然事物に強い関心を示せなかったことには、たぶん歴史的思想史的必然性があった。

マルクスは、いち早く人文主義的調和の哲学の欺瞞性とイデオロギー機能を批判していた。同時に、自らの哲学を、人間の本質の自己展開という意味で、ヒューマニズムの到達点と自負したこともあるが、晩年にはむしろ、人間の歴史的発展を自然史的過程の一部ととらえて、人間中心主義から自由になった。ところがそのことは後に、構造主義的マルクス主義の解釈と同様に、人間学を欠くマルクス主義であると批判されるもとにもなった。

ちなみに、コミュニズムには、全般的にエコロジー軽視がある。例えば、第二次大戦後のドイツにおいて緑の党とマルクス主義・社会主義が対立したことは、それを示す代表例である。これにはそれなりの理由がある。この点は改めて論じなければなら

ない重要課題である。ただ一言、ユルゲン・ハーバーマスの思想にみられる近代への固執とエコロジーの欠如にはたぶん、ヒューマニズムを介して表裏一体の関連があることを指摘しておこう。

戦後の諸秩序の混乱とともに、人間をめぐる多様な議論が交わされた。そのような状況に対して、ハイデガーは、1949年に発表した「ヒューマニズム」において、ギリシア以降の西欧思想のなかに一貫して流れる、人間の自由と尊厳を礼賛するこの思想を、根柢の弱い思い込みに依存する単なる形而上学にすぎないと断じ、人間の思考が克服すべき弱さの思想とみなした。いわば、ヒューマニズム思想の終焉宣告である。しかし、ハイデガーが、または他のだれかが、そう宣告しなかったとしても、ヒューマニズムの思想的有効性は期限切れであったのだ。人新世の時代認識が、遅ればせながらそれを裏付けた。

以上は、事柄の複雑さに比して短かすぎる展望かもしれない。だがこれだけでも、ヒューマニズム思想の豊かさは分かる。にもかかわらず、ヒューマニズムは徹底的に批判されなくてはならない。その理由としては、ピーコ・デッラ・ミランドラのように、倫理の個人性の問題を強調するあまり、後に人文学の社会科学的観点の希薄さを批判されるもとをつくったり、人文学者が一般に「自然事物」そのものについて関心が弱かったと指摘されるなどの難点を個別的に数え上げることはできる。それらの検討は、人文学の成果と課題を総合的に評価するには欠かせない。

しかし、本論が目指すのはそういうことではない。では何か。それは、ヒューマニズムが、いつも、人類とその業績、そしてその運命にしか関心を抱けないことにある。そこからは、人類もその小さな一部である、生物全体社会という世界観が育ちようもない。生物全体社会の世界観に照らしてみれば、人類のエゴである人間中心主義は、人間中心主義であるがゆえに有害であり、否定されなくてはならない思想なのである。

ただそれでもなお、ヒューマニズムをより広く深く理解しておくために、重要な関連語をさらに調べておこう。例えば「人間中心主義」の思想は必ず「エゴイズム」に収斂するのか、そして、「人間は万物の尺度である」という思想はそこにどう関連しているのか、という問いを立ててみる。どちらの命題も

人間一般・人類を想定していて、個人の場合を想定していない。しかし、万物の尺度は人類である、と言うのと、万物の尺度は個人である、と言うのでは全く違う帰結をもたらす。

まず「エゴイズム」を検討しよう。

ここでもまた、『哲学・思想事典』のご厄介になる。『事典』には、「エゴイズム」の項目はなく、「利己主義」の項目で説明される。ほかに「主体性」「人格主義」の項においても言及される。

「利己主義」は、「自己の利益や欲望の充足をひたすら追い求め、そうした己の行為が他者に及ぼす影響を度外視する行為原理」と定義される。18世紀に、キリスト教会を厳格な実践規範を示す場に改革しようと志したフランスのジャンセニスト（ポール・ロワイヤール派）が、ラテン語の「私（エゴ）」から作りだした言葉といわれる。

その後カントは、この概念を重視して、「論理的エゴイズム」「美的エゴイズム」「道徳的エゴイズム」といった区別を設けて考察するが、本稿の趣旨に関りないので立ち回らない。ただ、実践的エゴイズムと区別される理論的エゴイズムは、主観的観念論とも呼ばれ、実在するのは自分の自我だけである、という主張と同定され、またデカルト派などの独我論も、C.ヴォルフによってエゴイズムと同じ意味をもつと考えられた。

ルソーは、自己保存への関心である自己愛（amour de soi）と利己心（amour propre）を峻別して、前者は「理性によって導かれ、憐み（pitié）によって変容されて、人間愛と美德を産み出す」のにたいして、後者は「社会の中で生まれる相対的で、人為的な感情に過ぎず、あらゆる悪の源泉となる」とした。ところが反対に、ほぼ同時代のイギリスのアダム・スミスは、各自の利己心の追求が「見えざる手に導かれて」国民国家の富を増大させると肯定的に評価した（『諸国民の富』）。こちらが、資本主義社会の自由競争市場を支える理論となり、国民経済の指導者たちの信条ともなった。

このような、エゴイズムを廻る思想状況の中で、カントは、すべての悪の源泉となる「エゴイズム」に対抗しうる唯一の原理として、「複数主義」を掲げた。これは、「自分を世界市民の一員と考え、行動すること」と理解することができる。徹底して論理的かつ現実的に考える人であったカントが、「悪の源泉」に対抗するのに、「世界市民の一員」と自

覚して行動する、という原理しか考えつかなかったことの意味は重い。その点をしばらく考えてみよう。

ラテン語の「エゴ」は、既述のとおり、一人称単数の私のことであつたが、ラテン語文法では、動詞の格変化があることによって、「エゴ」を省いても、主語が「私」であることは分かる。それでもなお、「エゴ」をわざわざ用いるのは、自己顕示的で下品である、と感じられる。そういうむしろ修辞法上の理由によって「エゴ」は省かれるのが慣習となった。そのような事情があつてのち、利己的という道徳的非難の意味が重なつたのであろう。

一人称単数のエゴが次第に複数の集団のエゴへと、階梯的に拡大していく。例えば家族のエゴ、村のエゴ、職業集団のエゴ、地域のエゴ、階級のエゴ、国家のエゴ、文明圏のエゴというふうな。その階梯ごとに、エゴイズムの動機、意味、性格、求心力、強度は同じではあるまい。だが、どの階梯内であっても、我と非我から始まって、家族と他の家族、国家と他の国家といった対立があり、その間に生死を賭けた争いが生じる。戦争はその最たるものである。

ここで仮に、国民国家や帝国のさらに上位に世界国家が成立し、世界国家法（国際法ではなく）が制定され、国民国家の間の戦争を罰し、抑止する実権力があれば、パクス・グローバルは実現するかもしれない。カントは、その実現は現実的ではないと考えたがために、「世界市民の一員」の自覚という理念の代案を提示したに違いない。現に、国際連盟は失効どころかナチス台頭のタネを作る過ちを犯した。その過ちを繰り返すまいとして創設された国際連合も世界国家ではなく、今こそ出番というときに無力を暴露し続けている。現今世界は、権力の二極化、三極化の様相を呈しながら、パクス・グローバルの覇権を争っている状態と見える。

集団のエゴイズムの階梯ごとに異なる求心力に関わつていうと、国家のエゴは、愛国心の名のもとに、個人に生命を要求する一方、個人は自ら国家のために死ぬことを誇りにするといった強い求心力をもつ。そのことをE.カントロヴィッチは、『祖国のために死ぬこと』において雄弁に論じている。

国家批判論である『共同幻想論』を書いた吉本隆明が、人間の抱く幻想を、個人（自己）幻想、対幻想（愛人同士が共有する）、共同幻想の三位相に区

分したことはよく知られている。魅力的で独創的な国家批判論として、1960年代以降、非代々木系の学生運動家たちの熱狂的支持を受けた本書のなかでもとりわけ独創的と評価された対幻想論は、私見によれば、一種の家族論でもある。というも、吉本は、対幻想論の中で家族を論じる時があり、愛人二人の一心同体意識と家族成員の一体意識との区別を曖昧にしている。

そういえば、これ以前に吉本は、“あなたにとって戦後で最も重要な出来事は何ですか？”というアンケートに、“私が結婚したこと”と答えたことがある。まるで“二人のために世界はあるの”と歌った歌詞の世界ではないか。最初、誇大妄想的とも聞こえる答えに驚いた私も、対幻想論をそれなりに理解した後には、あの答えの吉本にとっての必然性および思想性に納得した。対幻想は、愛するカプルのエゴイズムであり、彼の「関係の絶対性」という言説とも呼応して、いわゆる個人主義にも共同体主義にも堕さない、両面の自立を支える理論的拠点であったのである。(ただ、これは、家族主義に堕さない保障はないと揶揄批判されたことも付言しておく)。

なおもう一点付言すると、吉本にはエコロジーの思想はない。詩にはコスモロジーがあるのに、である。彼の思想の問題圏はすべて人類内部に限られているからであろうか。コスモロジーの感覚は、必ずしもエコロジー思想に結びつかない、という一証左かもしれない。

本筋に戻ると、人類内部で普遍的立場に立つことと、下位の部分集団のエゴの一員であることはたしかに違う。そして、エゴの階梯性(個、家族、共同体、国家などのような)ごとにその差異と共通性があることを再確認しつつも、要するに、カントの世界市民集団は、人類の集団の最上段の階梯にある最大の集団である。その外部には、人間にとっての他者があるのみである。しかしその他者にこそ人類は依存して生存できる。外部の自然がなければ人類は存在できない。

たしかに「人類の外部の自然」という言い方はすでにおかしい。人類そのものが自然の一部であり、人間の内部の自然と外部の自然は、絶えず代謝を繰り返しているのだから。この事実がありながら、人類以外の生物の生死を、自分に無縁の他者の出来事と見なすのが人類集団のエゴイズムの意味であり、

ヒューマニズムの驕りの姿である。カントが期待する「世界市民」を構成する個々人も、人類の内部に閉じ込められて人類のエゴイズムを無邪気に通し続ける存在であることに変わりはない。

人類は、文明化とともに、生物界の食物連鎖の頂上に登りつめ、他の生物からは食べられないという特権的地位に就いた。動植物世界の中では一人勝ちである。その地位に安住して、人類内部では互いに食うか食われるかの争いを繰り返してきた。現今のウクライナ戦争だけでも、毎日、何千人のヒトが死んでいくが、同時に戦場では、大地のアリやミミズやリスなど数えきれないほどの小動物の生命が踏み にじられ、また、ひまわり、クローバー、糸杉などが大量に焼き殺されている。だが誰もそのことを気にも留めない。ヒトという種は、生物全体社会の他の生き物から見れば、むしろ消滅してほしい存在であろう。

さらに、人類の肉眼には見えない微生物やウィルスが無数に存在する。その種類は、動植物の種すべてをはるかに超えて多く、アフリカ、南・北極や海底深くに潜んでいるという。そのうち、人類に接触したのは、まだごく一部にすぎないと推定される。それらが今後、人類の生存を脅かす接触をするようになった場合どうということになるだろうか。今回は、新型コロナウィルスたった一つのパンデミックに人類はこれほど苦しめられた。かれらは、ごく短時間のうちに世代交代をするので、その進化の速度は、人類が対抗薬品を開発する速度より桁外れに早い。最終的には、人類の医療技術は必ず敗北すると微生物学者、免疫学者は予測している。先に見た『人類が破滅する6のシナリオ』の筆頭に「世界を滅ぼすスーパーウィルス」が取り上げられているのはもっともなことである。

このような状況に追いこまれてなお、私一己の魂の救済にしか心が働かない探求者のエゴイズムはあさましい。逆にまた、カントやヘーゲルにエコロジーの思想やガイアのイメージがないことを指摘するのは、小児病的なないものねだりと責められることだろうか。

さらにまた、人類しか念頭にない世界の平和を願う身勝手さを批判するのは、人類への裏切りとして非難されるべきことであろうか。

このようにして、ヒューマニズムを超える思想への願望は必然となる。それは、古い「自然主義」の

再検討と新しい「自然学」の探究から始まるであろう。

V 自然主義の多義性と曖昧さ批判から新しい自然学の方へ本能論に焦点を合わせてー

ヒューマニズムに対立する思想は、大きく分けると二つある。ひとつは、キリスト教の「神中心主義」である。これは、神からの解放を求めるヒューマニズムを許さない。人文学の中にもそれはあった。もう一つの対立思想は、「人間自然中心主義」であり、これは、神からの解放だけでなく、自然そのものからの人間の解放をも希求するが、神に支えられた伝統的社会規範からの個人の解放への希求を伴うことが多い。見られるとおり、ここにあるのは単純な二項対立ではなく神、自然、人間の三つ巴のこみ入った対立と連携である。

この三つ巴のもつれを解きほぐすこと自体が厄介である。それでまず自然主義の語義から入り、次に「本能」論の検討を手掛かりにして、新しい自然主義を考える展望を開きたい。

いわゆる自然主義とは何か。それは、文学史上の用語として、19世紀後半のフランスに、小説理論、作品として現れた。エミール・ゾラが『テレーズ・ラカン』序文の自然主義宣言、そして『実験小説論』において、科学の実験と実証の方法と成果を小説制作に持ち込むことを提唱したのが端緒である。これは近代初頭の、現実を客観的に描く写実主義文学の性格を引き継いでいる。

ゾラの業績は自然主義という訳語で日本に定着したが、Natureと日本語の「自然」との間の意味のずれが、のちに「自然主義」への誤解と混乱を招くことになった。因みに、第一法規の教育学大事典などに「自然主義」という独立項目はない。デューイの倫理学を自然主義と特徴づけることはあっても、「自然主義」は、教育学の学術概念として認知されていない。また、シェリングの「自然哲学」を主題にして博士論文を作成した研究者が、自然主義の系譜を教育の学説史上に位置づけるのに戸惑ったと告白している。コメニウス、ルソー、デューイに至る教育思想は、大まかに自然主義とも呼べそうなのに、これはどうしたことか。解明を要するテーマではなかろうか。もとより、梅根 悟の若き日の労作

「近世教育思想史における自然概念及び合自然原理の発展」を忘れていてわけではない。それは、コメニウス、ルソー、ペスタロッチをとりあげ、そこに流れる自然原理の発展を追求したすぐれた作品である。ただ、筆者が本稿で追求するのは、それとは次元を異にする別の課題であることは、これまでとこれからの論述に従うかぎり、あきらかであろう。

前述のフランス起源の文学上の自然主義は、産業革命と科学技術の達成に追従して、実証、実験など科学の方法に倣って小説を作成しようとしたが、自然科学の成果の通俗的理解に災いされた。例えば、ベルナルの『実験医学序説』やダーウィン『種の起源』に依拠したと自称しつつ、社会や人間を遺伝決定論的に捉えるにとどまった。ただ他方で、科学の「原因」概念を、社会における貧困や犯罪の原因分析に応用しようとするなど、社会的、科学的批判の叙述の可能性を追求した。

とりわけ、急速な産業化に伴い、貧富の格差、階級的矛盾が露わになりつつあったドイツでも、スペンサー、ミル、コントなどの影響のもとに、問題を科学的に、自然主義的に解明しようとする動きが1880年代に注目を浴びたが、「自然主義教育学」といったものはついに姿を見せなかった。

日本の自然主義は、まず文学の分野で唱えられ、それを通して教育思想にも影響を及ぼすという経過をたどったため、西洋とは違う理解をされた。劇作家にして批評家の島村抱月が「前期自然主義」と命名した試みは、エミール・ゾラの構想とは無縁の方向へ向かったと評される。このように、日本の「自然主義」は、西欧と逆に、前科学的かつ社会性欠如のロマン主義的性格に彩られている。

以上のような日本の特殊性とは別に、南方熊楠、牧野富太郎、今西錦司等ナチュラリストの系譜があるが、今回は立ち入る余裕がない。

「自然主義」の本来の意味に迫るには、「本能」の概念に注目するのが有効に思える。

本能は、「生まれつきもっていると考えられる行動の様式や能力」と『広辞苑』にあり、さらに「特に動物が外界の変化に対して行う、生得的でその種に特有な反応形式」と説明されている。

専門的な『生物学辞典 第4版』(岩波)では、「本能の厳密な生物学定義は困難である」として、それは「生命力」「精神」といった言葉と同様に、「生物学的な実体」がなく、現在では「記述のための概念

としてのみ用い、説明概念としては用いられない」という。ところが、一般向けに書かれた小原喜明『本能—遺伝子に刻まれた驚異の知恵』に取り上げられた数々の事例がどれほど深い謎を豊かに蔵していることか。本能の諸事実は、説明概念としては使えないと片づけるには惜しい、理論的に考究しがいい概念である。ちなみに、コンラート・ローレンツが発明した動物行動学はここに深く関わっている（『ソロモンの指環』）

『哲学・思想事典』を参照すると、「本能」とは、ラテン語の「内なる刺激するもの（*instinctus*）に由来する」とある。その原義を保ちつつ、さまざまな意味に用いられ、「本能と理性・知性との関係をどうとらえるか、そうした諸能力をどの生物が有すると考えるかも論者によってさまざまであり、それに応じていろいろな生物観・人間観が形づくられてきた」とある。

さて少し回り道をしよう。

エコ・フェミニズムは女性を解放するどころか、逆に「自然」とか「生命」という、より大きく抽象的な全体性に隷属させるイデオロギとなる、と上野千鶴子に嘲笑されたことがある。確かに、月ごとのメンスをうとうとして、他者である自然から強いられる屈辱とを感じる若い女性が多いと聞く。

それとは対照的なのが、比較解剖学者三木成夫の科学的想像力である。三木は、「人類の生命記憶」という副題をもつ『胎児の世界』において、“たった一つの細胞である受精卵は、出現当初の生命体そのものが発生した時点から出産にいたるまで、母の胎内で羊水につかり続けるという事実”を限りなく重視する。羊水は、生命そのものが地球に誕生したときの環境、即ち「太古の海」と同じ成分から構成されている。その羊水の中で、胎児は、生命の35億年の進化史を凝縮して体感する。言い換えれば、現存の個体の身体は、35億年の進化の歴史性を経ている。太古の海が、35億年の時を隔てて、今を生きる女性一人ひとりの中に保存されている事実は、新鮮な驚き呼び起こさないだろうか。自分も、気が付けば天体の運行のリズムに合わせて日々生きている存在なのである。ちなみに筆者自身は、この世に生まれて以来地球の90回目の公転に付き合いつつある存在である。

こういう文脈で考えると、メンスを屈辱とを感じるのは、現存の個体である「私」が自然から解放され

たいという願望の現われであり、自立と自律を望む人間らしさでもあろう。その意味では、ヒューマニズムの感性である。さらに、実存感覚やエゴイズムも、たとえ思想の位相はどれほど異なっているとしても、これと無縁ではありえない。

それとは別に、ヨガや座禅などの宗教実践では、自然・宇宙との一体化を目指して、ひたすら自我を捨て去る修行の方法が追求される。これは、一種の人間改造であり、文化革命でもある。それを、人間の自然・本性に立ち返ることと考えるか、新たに到達することと考えるか、いずれにしても、自然・本性をどういうものと見定めるかによって、ヒューマニズムに即した思想・行動とも言えるし、全く逆に、自己中心と人間中心主義からの脱出をめざすアンチヒューマニズムの思想・行動とも言えることになる。

自然本性とは何かを問うことは、本能と呼ばれる、種ごとに固有の生得的能力、そして種と生態系の関連を、進化の長い歴史時間の中で考えることに収斂するであろう。

例えばキリンが、大好きな木の若芽を、後に続く仲間のことを思いやって食べ残す習性は、種の長い進化の過程で形成された一種の伝統ともいえる。伝統を学習して身に着けることと生得的にもつ本能とは、たしかに共時的には矛盾する事態である。しかし、本能なるものが実は、桁外れに長い進化の過程で個別的に学習されたことと、遺伝子に内面化されたこととの統合であった、と考えることもできる。これは、「エコ・エヴォ・デヴォ」の観点を統合しようとする「生態進化発生学」が目ざす主題であろう。

ここには、個体エゴの生存と種全体が生き続けるための種のエゴは、対立をはらみながら統一されている。だがそれは、その種内部の中だけの統一であり、種内の普遍性であっても、生物全体社会の中では、やはり種のエゴイズムであることに変わりはない。これは、生物全体社会のどの種においても付きまとう普遍生物学的原理であり、人類においては、人類内の全体性・普遍性であるヒューマニズムが、生物全体社会・ガイアにおいては、人類のエゴイズムに転じるのとまったく同じ論理構造である。

ただ、人類とは、自然本能を失いつつある種であるという事実を、どのような文脈と展望と問題構成の中で考えるのかという問題は依然として残ってい

る。

おわりに

教育学の原理論で、環境破壊問題を正當に主題化できないのはなぜか。そのわけを究明すること自体がまず課題となるらしい。もしかすると教育学の一般半解の＜自然主義的ヒューマニズム＞もその一因かもしれない。

そこで今、若い研究者に期待、という以上に要求されるのは、何をおいても、最先端の生物学・自然学の成果に学びながら、教育思想史上における自然概念の系譜を整理するだけでなく、それを位置づける正しい文脈を新しく構成する仕事である。生物学の最先端に無知のままでは、教育の原理論への発言権を失うことになるであろう。加えて、量子論と宇宙論、極小と極大の世界の同一性を見出しつつある自然物理学の成果にも関心を払わなくてはなるまい。

筆者の心残りのなかに、ジェインズの『神々の沈黙』とライターの『ニーチェの道德哲学と自然主義』を熟読する余裕がなかったことがある。

本稿が提起する課題は、実践レベルでは、北村和夫のいうエコライフを楽しんで身に着ける一種の文化大革命をどのように構想できるかということにはほぼ尽きる。

けれども、より基礎的理論的課題としては、これもまた、北村が発想した原理に従って環境認識の方法を転換することがある。それは、子供が身近なことにしか学習意欲をもたないという通念に対立するカリキュラムの可能性を考えることである。その出発点は、壮大な宇宙への感覚・体感に裏付けられた認識に始まる。即ち、ハッブルの法則、ビッグバン等の宇宙の歴史と現在の構造の基本からはじめて、最後に身近な自然観察や自己の身体といったテーマが登場する。

さらに、残る課題として、エコライフを愉しむことは、今を生きることに徹することであるが、そのことと未来世代の生存の意味とを繋ぐ歴史哲学が両立するかという難問である。これは教育という営みにおいて必ずついてまわる世代継承と未来性の問題である。

参考文献

- グテル、フレッド、2013、『人類が絶滅する6のシナリオ』河出書房新社〔原題 The Fate of the species – Why the Human Race May Cause Its Own Extinction and How We Can Stop It, 2012〕
- 今西錦司、1972、『生物の世界』講談社
- 今西錦司、1990、『自然学の展開』講談社
- ジェインズ、J. (柴田裕之訳)、2005、『神々の沈黙：意識の誕生と文明の興亡』紀伊国屋書店〔Jaynes, Julian, 1976 The Origin of Consciousness in The Breakdown of Bicameral Mind, Tuttle・Mori Agency, Inc.〕
- カントロヴィッチ、E. (甚野尚志訳)、2006、『祖国のために死ぬこと』みすず書房〔1990〕
- 北村和夫、2000、『環境教育と学校の変革—ひとりの教師としてなにができるか—』農文協
- 藏本由紀、2016、『新しい自然学—非線形科学の可能性—』筑摩書房
- 教皇フランチェスコ (瀬本正之、吉川まみ訳)、2016、『回勅 ラウダート・シ』〔Litterae Encyclicae Laudato Si, 2015, Libreria Editrice Vaticana〕
- ライター、B. (大戸雄真訳)、2022、『ニーチェの道德哲学と自然主義』〔Leiter, B. 2015, Nietzsche on Morality〕
- 三木成夫、1983、『胎児の世界』中央公論社
- ローレンツ、コンラート、日高敏隆訳、1998、『ソロモンの指環』早川書房〔Er redete mit dem Vieh, den Vögeln und den Fischen, 1983〕
- 宮澤康人、2013、『未来世代が生き延びるための＜大きな物語＞の挑戦—＜自然＞に根拠をもつ教育の歴史哲学の方へ—』『教育哲学研究』第108号
- 宮澤康人、2014、『エコロジー・ポストモダニズム・環境＝身体系の教養—＜自然＞主義の再考をめぐる読書ノートから研究動向へ—』『研究室紀要』第40号 東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学コース
- 太田 竜、1989、『エコロジー教育学—新人類への進化の途—』新泉社
- 小原喜明、2021、『本能—遺伝子に刻まれた驚異の知恵』中央公論社
- 斎藤幸平、2020、『人新世の「資本論」』集英社新書
- スコット、F. ギルバート/イーベル、デイヴィット、2012、『生態進化発生学—エコ・エボ・デボの夜明け—』東海大学出版会〔Gilbert, Stoff F. and Epel, David, 2009 Ecological Developmental Biology: Integrating

Epigenetics, Medicine and Evolution Sinauer Associates
Inc]

篠田謙一、2022、『人類の起源—古代DNAが語るホモ・サ
ピエンスの「大いなる旅」』中公新書

梅根 悟、1932、「近世教育思想における自然概念及び合自
然原理の発展」『教育史学の探究』1966 講談社

梅原 猛、2013、『人類哲学序説』岩波書店

吉本隆明、1982、『共同幻想論』角川書店（初版1968、河出
書房）

